

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **4** までで、16 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に H B 又は B の鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の A・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、** **や**
。 **や** などそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 東京と京都を往還する。
- (2) 私の祖父は団塊の世代だ。
- (3) 空港に設置されている検疫所。
- (4) イベントに人々が雪崩のように押し寄せた。
- (5) 仕事内容のナンイは問わない。
- (6) 静かなコスイに周囲の山々が鏡のように映りこむ。
- (7) ジンツウリキがあるかのようにすべてを見通した。
- (8) いつも物事をシンショウボウダイに話すのは彼の悪いくせだ。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

松原芳枝は息子利樹から、「上京し人気漫画家のアシスタントになると決めた。」と言われる。翌日、市民センターに立ち寄ると、将棋教室を主催する角田栄吉に声をかけられ、指導を受けることになった。

〔松原……芳枝です。〕

ぺこりと頭を下げると、角田さんも「よろしくお願ひします。」と礼をする。そして鞆の中から紙を一枚取り出し、盤の横に広げた。

将棋の駒の並べ方、それぞれの駒の動き方一覽が書かれた解説シートだ。角田さんがあれこれと説明しながら自分の陣地に駒を並べ始めたので、なんだか私もそうしなければならぬ運びになってしまった。

シートを横目に、崩れかけた山から駒をえり分けていく。自分から見ると三列のマスを使うらしい。

まずはわかりやすいものからと、私は最前列に歩兵を揃えた。歩歩歩歩歩歩歩歩歩。

角田さんは王将の駒を自分のほうに引き寄せると、「芳枝さんは、こちらで。」と、駒をひとつ私によこした。

王将ではなく「玉将」と書いてある。

「え、なんですか、これ。」

「ギョクです。対局のときは、強いほう、あるいは目上の者が王を持ちます。」

「はあ。」

勝負する前から、どっちが上なのか明らかにされちゃうのか。そして私は弱くて目下だから、王は持てずに玉を与えられる。はなっからしんどいゲームなんだなあと、私はちよつとやる気をそがれた。

しかし角田さんの教え方はわかりやすくていいねいで、心を惹きつける明るい何かがあった。私は小学生になったような気分で、駒の名前や動きの説明に耳を傾けた。

駒それぞれの強さは、フットワークのエリアの広さが決め手のようだった。前、後ろ、横、斜め。どんなふうにも動けるか。そして相手の駒が自分の行ける先であれば「取る」ことで持ち駒にできる*。

つまりそれは「取られる」ことでもあって、そういう意味ではおそろしい。さっきまでの味方が、今度は敵となって攻撃してくるかもしれないのだ。

駒の動かし方をひととおり説明したあと、角田さんは言った。

「しかし、たくさん駒を取ればいいというものではないんです。どんなに勝勢であっても、これを取られたら負けです。」

角田さんがピシッと指さした駒は、王将だった。

そうか、そうなのか。

私は納得してうなずいた。

将棋って、要は王様を守るために立ちまわる戦なのだ。

そして私にとっての王様は、ほくろのついた「玉将」ということらしかった。

「では、やりながら覚えていきましょう。」

先手、後手。角田さんにアドバイスされながら、順番に駒を進めていく。

角田さんは中指と人差し指で器用に駒を挟み、盤の上にはちりと置いた。その仕草がなんだかカッコよかったので私も真似してみたが、人差し指が邪魔してうまくいかない。

「最初はそんなもんです。いいのです。」

角田さんは笑った。私は肩をすくめ、人差し指と親指でつまんだ駒を下ろす。

とにかく王様の近くに相手の駒が寄ってこられないようにする――。

それなら、王様のまわりにスペースを作らなければいいのでは。

そう思って、動き方一覧と首っ引きで玉將に壁を立てるようにして駒を固めた。角田さんがどんなふうにも攻めてこようが、まずはガードが先だ。

角田さんはそれを見てにやにやしていたが、何も言わない。

そうこうしているうち、私はハッとした。

気がつけば、私の番がきても、もろどの駒をどう進めても何かしらを取られてしまうという状況になっている。

私は王様を守ろうとすずぎて、動けなくなっていたのだ。

A、というのは、まさにこういうことを言うのかと、私は変なところでいたく感心した。

練習ですから、と角田さんは、どうすれば良かったのかをいいねいに解説しながら駒の位置を変え、ゲームを続行した。

(1) 私はいつしか、盤の上の駒たちに妙な愛着を抱き始めていた。

体いっばいの名札をつけた彼らは応援したい選手であり、自分自身だった。

一回勝ったと思っても、次の手でやられる。

全体を見ていないとだめなのだ。先の先の先まで、場を読みながら。

角田さんの歩兵が、私の陣地に入ってきた。

「はい、ここで、この駒は裏返ることが出来ます。」

歩兵がくるりと翻る。そこには「と」と赤い字が記されていた。

「成る、と言います。相手陣の三列どこかに入れば、動ける範囲がグレイドアップします。」

角田さんは盤の隣に置いていた解説シートを裏返す。

そこには「成る」駒の一覧が書かれていた。

たとえば歩兵、香車、桂馬、銀将。その駒たちが「成る」と、金將と同じ動きをとることができるのだという。

「歩兵は、成ると『と金』と呼ばれてね。ひとつずつ前にしか進めなかった歩兵が、金と同じように前後左右、斜め前へと一気に行動範囲を広げる。これはまあ、たいそうな躍進で、私は好きですな。」

金と同じように。

私は盤の上をあらためてじっと見た。金将は玉将のそばで堂々と誇らしげだった。

成る。そうすれば、他の駒より小ぶりですすずしか動けなかった歩兵が、王様の隣にいた戦士と同等になるのだ。

ただ前に前に、ひとつずつのマスを着実に進んで、しっかりと力をつけて……。

じわつと涙がこみあげてきて、私は思わず「うっ。」と声を漏らした。

角田さんが身を乗り出す。

「おや、どうされましたか。」

私はあわてて指で涙をぬぐう。

「いえ、すみません。なんだか私の息子みたいだなと思って。」

「息子さん？」

テストの、プリントの、カレンダーの、チラシの裏に。

一枚ずつ、漫画を描いて描いて描いて。

新人賞に応募して応募して、出版社に持ち込んで持ち込んで、尊敬する漫画家のところに漫画を送って送って送って送って。

こんな田舎町では、漫画の道具を手に入れたり、知識を蓄えたり技術を磨く場も限られていただろう。デザイン学校に通ったわけでもない、漫画家と接触する機会もなかったに等しい彼が、ひとつずつの前進で漫画界の壮大な陣地に乗り込んでいき、これから見事に「成ろう」として

いるのだ。
涙が止まらなくなり、私はトートバッグからハンカチを取り出しながら言った。

「息子が、漫画家になるって言い出して。東京にいる漫画家さんのところに弟子入りすることを決めてきたんです。きっとこういうことなんですね。息子は王様のところに、戦いを挑みに行くんだわ。」

すると角田さんは少しだけ間を置き、ゆっくりと答えた。

「いや、それはちよつと違うかもしれませんよ。」

違う？

私は顔を上げる。角田さんはパイプ椅子の背にもたれ、穏やかに笑みを浮かべた。

「だって息子さんは、師匠を倒しに行くわけではないでしょう。」

「それは……」

私が口ごもっていると、角田さんは王将の駒を手を取った。

「この駒には王将と書いてありますが、王将ではないのかもしれませんが。」

「え？」

「諸説ありますが、本来、将棋の駒には王将は存在しなかったと言われています。もともとは、玉将しかなかったんです。玉とはつまり、寶石のことです。」

寶石。

私は口を半開きにしたまま角田さんを見た。彼は続ける。

「将棋はね、敵国の王将を倒す合戦ではなく、玉を……己の宝物を守り、さらなる宝物を取りに行くというドラマなんです。私はそう解釈しています。」

手元にある「玉将」が、急に、ほれほれするほど美しく見えてくる。

弱者にあらかじめこちらを差し出すのは、強者の思いやりみたいなことなんだろうか。

角田さんは、解説シートをこちらに向けて「成る」駒について講話しはじめた。

香車は成香、桂馬は成桂、銀将は成銀、角行は竜馬、飛車は竜王

……。

選ばれしメンバーは、成ることで名前を変えていく。

「どうして歩兵だけ、ひらがなの『と』なんですか。」

私が首をかしげると、角田さんは顎に手をやった。

「これも諸説ありますね。『金』の崩し文字だという説が有力ですが、金ではなく、キンという音が同じ『今』の崩し文字だと主張する人もいるし、『歩』の上半分の『止』だとも言われています。」

「へえ。」

「まあ、実際のところよくわからん、ということですね。皆さんそれぞれに、好きなように想像してそういうもんだと思えばいい。世の中、そんなことばかりですよ。」

なるほど。

私は自陣地の歩兵をひとつ裏返し、そこに書かれた赤い「と」の文字を見つめた。

「息子さんの玉は、いったいどんなことなんでしょうなあ。楽しみですですな。」

角田さんの言葉に、私はほほえんでうなずく。

利樹の「玉」はきつと、漫画を描きたいという、その熱意そのものだ。

親が教えたわけではない、自分だけの……言うなれば、天から授かったその宝物を彼は守り、さらなる輝きを手にするために進んでいく。

私にとって、この赤い文字は間違いなく、「としき」の「と」だった。

こんな素晴らしい「金」の力を、彼はすでに持っていったのだ。

*かじきょうた
藤木洋太くんと同じ日に、この地上に身を置いた利樹。

私は再び、洋太くんのお母さんのことを考えた。

時を同じくして、私たちは息子を産み育ててきた。

洋太くんが赤ちゃんの頃、彼のお母さんもその小さな体を胸に抱き、ただただ健やかであれと願っただろう。

そして、我が子がおぼつかない足取りで初めて歩いたときのことを、そのときの感動を、今でもはつきりと覚えているだろう。

彼らはいくつもの日々を重ねて二十歳になり、自分の行くその先の先を見つめているのだ。

⁽⁴⁾「……やっぱり私、天才を産んでしまったのかもしれないわ。」

ひとりごとをつぶやいた私に、角田さんが「へ？」と顔を突き出してくる。

いえいえ、と笑って、私は盤に歩兵を戻した。

目の前に誰もいない、広がるばかりの真っ白な未来へとひるまずに進む歩兵こそが、どの駒よりも勇ましかった。

でもそれでよかったのかもしれない。

私が何かを決めなくてはいけなかったり、迷ったりするようなことがあれば、ずるずるとその機を逃していただろう。

雨が降り出しそうな、風の強い日の朝、利樹は家を出る支度をしていった。

息子の巣立ちが、思いのほか早く、あっけなく訪れて、私は少しだけ放心していた。

でもそれでよかったのかもしれない。

私が何かを決めなくてはいけなかったり、迷ったりするようなことがあれば、ずるずるとその機を逃していただろう。

雨が降り出しそうな、風の強い日の朝、利樹は家を出る支度をしていった。

駅まで一緒に行つて見送るようなことはしないと、あらかじめ伝えてあった。あえて休みなど取らず出勤日とし、いつもどおり変わりなく朝食をとり、なんでもないふりをして後片付けをした。平静を装い、保つために。

チェストに置きっぱなしにしていたチラシを手に取り、利樹が言った。

「え、将棋やるの？」

将棋教室の生徒募集。

場所は市民センターコミュニティスペースにて、講師は角田栄吉。

私は照れ笑いをする。

「たまたま、仕事の休みの曜日と重なるから。行ってみようかなあって。」
「へえ、いいんじゃない。」

利樹はチラシをチェストに置きなおし、なんだかちよつと嬉しそうに笑った。

「母さんが自分から積極的に動くときって、絶対にいい方向にしかいかないから。勝算ありつてことだからさ。」

私は驚いて利樹を見る。そんなふうに言われたのは初めてだったし、すごく意外だった。

「そ、そうかな。」

「うん。普段はあんまり大胆な行動に出るタイプじゃないけど、ここっというところではちゃんとキメてるっていうか。そうやってずっと、俺のことも守ってくれてた。」

⁽⁵⁾ 眼鏡のフレームを少し上げながら、利樹はちよつとはにかんだ。

そんなこと。そんなこと、思ってたなんて。

(青山美智子「授かり物」による)

〔注〕 歩兵——将棋の駒の一つ。「王将(王)」「玉将(玉)」「香車」

「桂馬」「銀将」「金将(金)」「角行」「飛車」も同じ。

持ち駒——将棋で相手から取り自分の戦力として使える駒。

藤木洋太——史上最年少で名人位を獲得した棋士。

〔問1〕 空欄 A に当てはまる慣用語として、最も適切なのは

次のうちではどれか。

A 打つ手が無い I 耳が痛い

U 指をくわえる E 足が地につかない

〔問2〕 ⁽¹⁾ 私はいっしょか、盤の上の駒たちに妙な愛着を抱き始めていた。

とあるが、ここでの芳枝の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

A 勝負前に目上と目下に分けられると思っていた駒が、自分の陣地にいる間は大切な仲間になると気付き、応援したくなっている。

I 王様を守るための戦として将棋を捉えたことにより、ゲームの道具でしかなかった駒を人間のように感じ、親しみを覚えている。

U 長時間将棋に取り組むうちに没入感が深まり、理解できなかった駒が楽しくなって、もっと上手になりたいと思っている。

E 角田さんの丁寧な解説を聞いたことで、弱いとしか思っていなかった駒が実はとても強いと知り、嬉しく感じている。

〔問3〕⁽²⁾「じわつと涙がこみあげてきて、私は思わず「うっ。」と声を漏らした。とあるが、この理由として最も適切なのは次のうちではどれか。

ア 王様を守る戦士のような駒たちの姿と、漫画という新しい世界で戦いに挑む利樹の姿とを重ね、頼もしく思ったから。

イ 敵陣に向かってどんどん進んでいく駒たちの姿と、自分の元から旅立っていく利樹の姿とを重ね、寂しい気持ちに襲われたから。

ウ 小ぶりの駒が「成る」ことで徐々に強くなる様子と、幼かった利樹が成長したくましくなった姿とを重ね、感慨深くなったから。

エ わずかに前に進むだけだった駒が飛躍する様子と、夢をつかみ上京する利樹の姿とを重ね、これまでの努力を思い感動したから。

〔問4〕⁽³⁾「すると角田さんは少しだけ間を置き、ゆつくりと答えた。とあるが、ここから読み取れることとして最も適切なのは次のうちではどれか。

ア 芳枝の知識が少ないことを改めて感じ、思い違いを正しながら将棋の奥深さを伝えようとしている。

イ 感極まっている芳枝を落ち着かせるために、将棋の豆知識を披露しながら他の話題を提供しようとしている。

ウ 芳枝の思いを受け止めつつ、将棋の知識を伝えながら息子に関する別の捉え方を示唆しようとしている。

エ 芳枝の考えに理解を示しながら、将棋の弟子の前では威厳のある姿勢を維持しようと努めている。

〔問5〕⁽⁴⁾「……やっぱり私、天才を産んでしまったのかもしれないわ。」とあるが、ここでの芳枝の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 利樹には身の程をわきまえず行動するところがあるが、漫画の才能については本物だと信じ込もうとしている。

イ 歩兵が『と金』となつて王様に戦いを挑むように、利樹の今後の活躍も疑いがないものと確信し頼もしく思っている。

ウ 小さな体で生まれおぼつかない足取りで日々を過ごしていた利樹が、気が付けば急激に成長していたことに驚いている。

エ 利樹が漫画にかける熱意を保ちさらなる高みを目指すという素晴らしい力をすでに持っていると感じ、誇らしく感じている。

〔問6〕⁽⁵⁾「眼鏡のフレームを少し上げながら、利樹はちよつとはにかんだ。とあるが、ここから読み取れることとして最も適切なのは次のうちではどれか。

ア 母が新しいことをはじめるのを応援するとともに、自分を今まで支えてくれたことへの感謝を照れながら伝えている。

イ 今まで自分のために様々なことを我慢してきた母が、新たな挑戦をするのをさりげなく応援しようとして決心している。

ウ 母の時折発揮される積極性に驚きながら、引越してから話をそらして母と別れるさみしさを紛らわそうとしている。

エ 忙しいと言いつつ別れのさみしさを隠す母の愛情に気づき、反抗しながらも最後は素直になろうとしている。

〔問7〕 本文の内容や表現について述べたものとして最も適切なのは次のうちではどれか。

- ア 登場人物の中で唯一の女性である芳枝は、感情に蓋をしていて自分を律する落ち着いた女性として描かれている。
- イ 登場人物の心情を掘り下げて描くことで、口に出せない複雑な思いをお互いに抱えていることが表現されている。
- ウ 将棋初心者である芳枝の視点から描くことで、将棋を知らない読者にも状況が読み取りやすい工夫が施されている。
- エ 「ピシッと」「ぱちりと」「くるりと」などの表現を多用し、将棋をさす場面のスピード感や緊張感を高めている。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

雲という言葉から、文脈によってワクワク感や憂鬱感を受け取るように、言葉の意味と感情は密接な関係にあります。言葉によってある決まった方向に心理が傾くことはたしかです。言葉で意思疎通も情報交換もでき、小説を読んで感動したり、新聞記事を読んで世の中を知ったりできるのは、言葉には一定のイメージを呼び覚ます力があるからです。

言葉によって、心に抱いていなかったイメージが現れるなら、それは言葉があなたの心に働きかけ、あなたにアクションを引き起こすきっかけを与えたり、別の感情を引き起こしたりすると言えます。

この「イメージを呼び覚ます力」を「呪術」(魔術・魔法)と定義したいと思います。

海外でも日本と同じく、信号は三色ですが、日本と違って「青」ではなく「緑」と言うでしょう。日本語では緑色のりんごを青りんごと呼び、木々の瑞々しく濃い色を「青々とした」と呼びます。首を縦に振れば「よい」、横に振れば「だめ」を意味することも、日本人どうしならそれ以外にないとわかります(逆になる文化もあります)。

自然によって決定された刺激と反応は一義的な関係の特徴としますが、人間が決めた「象徴」は、このように文化によって異なったり、心に生じる反応が人によって異なったりするのを特徴とします。⁽¹⁾では、文化や育った環境が違うと人はわかりあえないのでしょうか？

文化による違いを「乗り越えられない違い」だと考える立場は、かなり強い「相対主義」という考えかたです。この立場では、文化の違いを超えた交流ができないことになってしまいます。ですが、いま日本語の「青」という言葉が「緑」であると説明したように、「違い」を説明できるなら、それは乗り越え可能な問題でしょう。

すべての言語は違いを超えて通じあうと考えるなら、それは「普遍主義」といえます。たしかに人類であるかぎり、すべての人に共通の要素があるから、文化を超えて算数や数学が理解可能になります。しかし同じ言語文化のなかに生きる人でも、経験、前提、生きる空間、価値観に違いがあります。文化が違えばもつと違う可能性があります。

では、文化の違いを橋渡しするのは「解釈」でしょうか。そうだとし、ても、解釈が「なんでもあり」だと、結局は一方的な理解で終わってしまい、相互理解にならないでしょう。重要なのは、むしろ言葉の意味は「なんでもあり」にできない点です。「解釈はなんでもあり」ではなく、社会的・個人的な前提条件を共有すれば、個人の違いや文化の違いを乗り越えて同じものをイメージすることも可能になるのです。

(2) 人間はどうして物語やファンタジー、ホラー小説のように、非現実の世界を思い浮かべ、それを楽しみ、悲しみ、心を動かせるのでしょうか。また、自分とは無関係の人が不当な扱いを受けたり、不幸な事故に巻き込まれたりした事件を知ったら、それはあつてはならないことだと、その人のために「いきどおり」や「やるせないさ」を覚えることがあるはずで、このように、自分が体験しない事柄を理解させることが言葉の機能の驚くべき側面です。この機能があるからこそ、人間は学問や技術、文化、文明、芸術、遊びを発達させることができました。この機能はイメージを生む働きを根本にもっています。

誰かが「リングを思い浮かべてください」と言った瞬間、目の前にリングがなくとも、心の中にふんわりとリングのイメージが湧き起こるはずで、目の前にリングがあるときも、実はこのイメージは目の前の対象と一致して働いています。目の前の対象が、一致している間は、そのズレに気づかないだけです。ですが、少しでも目の前の対象とイメージとがずれると、「あれ、なんか変だな、思ったのと違うな」と感じるは

ずです。

そもそも言葉は、概念と音・文字・ジェスチャーとを、目の前の具体的な対象ではなく、漠然と「リング一般」のように一般的な意味に結びつけることを第一の働きとします。言葉は「思考」に立ち現れてくる意味に概念を指し示すことが第一の働きです。そして、言葉はイメージと密接に結びついて「思考」を作り出しています。

言葉によるイメージの呼び出しは、自分でコントロールできないほど強力です。たとえば、「リングを思い浮かべないでください」という文を読むとします。すると、その文が「思い浮かべるな」と命令しているのに、「リング」と聞いただけで、どうしてもイメージが湧き起こってしまいます。

言葉は、言葉の外に現実には存在しないイメージを創り、それを名づけることで、物語を生み出すことができます。ドラゴンや一角獣ユニコーンを考えてください。これらの言葉に対応する存在はありません。ところが物語の中で、言葉を組み合わせると一定のイメージを構築することができるので、その物語の描くイメージを心の中に形作ることが可能です。

「物語」は、語り手の与える解像度と、聞き手のイメージ再現力が高いほど、たんなる知的な理解を超えて、真に迫るものになります。

語り手の解像度が高く、たとえば宇宙について、死について、より細かく伝えれば、聞き手の知的理解は高まります。さらに、聞き手が宇宙について並々ならぬ関心を持っていたり、身近な人の死を経験したばかりだったたりすれば、その物語はより具体的な像を結ぶでしょう。

しかし、同じ映画を観ても感じかたが人によって違うように、語り手がいくら言葉を尽くしても、聞き手のほうが解像度の低いまま物語を受け取っているとき、そこに真の理解は生じません。

言葉は単独で成立するものではなく、相互作用性をもつという第三の見かたを反映した考えかたです。⁽³⁾ 語り手と聞き手によって、物語は変

わるのです。

宇宙は138億年まえに大爆発を起こすことで始まったと言われます。いわゆるビッグバンです。そんな前に人類は存在しません。それなのに、人類はその痕跡（残光）を観測し、計算し、行くこともできない宇宙の彼方^{かなた}やはるかな過去の出来事を理解できます。これは言葉なしには不可能です。もっと正確にいうと、言葉によるイメージの働きがあるからこそ、私たちは難しい計算をしなくとも、ざっくりとながら何が意味されているのか理解できます。

1年はイメージできますが、138億年を正確にイメージすることはできないはずです。三角形はイメージできますが、千一三角形はイメージできません。でも、意味はわかります。ここで「イメージする」とは正確に思い描くことではなく、ざっくりと思い描くことです。

これは、リングのイメージが細部に至るまで正確であつては不便なのと一緒にです。もしリングのイメージがどのような赤のグラデーシオンか、どんな大きさかミリ単位まで正確に決まっていたら、「リング」という言葉で指し示すことができるのは世界で一つしか存在しないことになってしまいます。それでは世界を構成する物や出来事と同じ数だけ言葉が必要になってしまい、不便です。このざっくりとした不特定さによって、言葉は便利に使えるわけです。

花を眺めるとき、誰もその花のすべてを見てはいません。花の中にまどろむ小さな虫も、花に水や養分を送る木の活動も、かすかにそよぐ風も、それが運ぶ香りもチリも見えていません。世界は細かく見ようとすれば、どんどん細かく見ることができません。

この瞬間に世界の裏側で起きている出来事も人々の不幸も、自分の足元で活動する微生物の営みも、後から知らされないかぎり知ることはいでしよう。知らされても、現実の極微の世界まで体験できません。世

界には言葉になつていないさまざまな事物や出来事、感情があります。こういった未知の何かを「これは何々だ」（主語＋述語）の形で名づけることで、私たちは「知」を拡大していきます。⁽⁵⁾しかし、そこに終わりが無いことは、自然の広さと複雑さ、「思考」の多様さを考えるだけで想像できます。

言葉の意味の一部は現実の物や出来事にぴったり対応するさまざまなイメージですが、現実⁽⁴⁾に当たる対象のないイメージも無数に存在します。このように、現実⁽⁴⁾に結びつかない側面があるからこそ、体験できない宇宙の彼方や極微の世界を言葉によって理解し、言葉によって物語を生み出すことができます。

（小野純一「僕たちは言葉について何も知らない」（一部改変）による）

〔問1〕⁽¹⁾では、文化や育つた環境が違つと人はわかりあえないので

しょうか？とあるが、わかりあうためにはどのようなことが必要だと筆者は述べているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

- ア すべての人にある共通の要素の認識
- イ 文化の違いを広く受容する解釈の理解
- ウ 社会的・個人的な前提条件の共有
- エ 学問や技術、文化、文明、芸術、遊びの発達

〔問2〕⁽²⁾ 人間はどうして物語やファンタジー、ホラー小説のように、非現実の世界を思い浮かべ、それを楽しみ、悲しみ、心を動かせるのでしょうか。とあるが、その理由を示した文として最も適切な一文を五十字以上五十五字以内で抜き出し、始めと終わりの五字を書け。

〔問3〕⁽³⁾ 語り手と聞き手によって、物語は変わります。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 語り手と聞き手それぞれの対象に抱く関心が高いほど、構築された一定のイメージの変化が明確になっていくということ。
- イ 語り手と聞き手それぞれの対象に関する解像度と再現力の差異によって、呼び出されるイメージに様々な違いが出るということ。
- ウ 語り手と聞き手それぞれの知的水準の差異によって、ある言葉について何を一般的な概念と捉えるかが違ってくるとのこと。
- エ 語り手と聞き手それぞれのコミュニケーション能力が高いほど、呼び出されるイメージが制御不能なほどに強力になるとのこと。

〔問4〕⁽⁴⁾ これは言葉なしには不可能です。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

- ア 自らが体験できないような事柄について理解するためには、言葉によるイメージの働きに頼るほかないから。
- イ 現実には起こりえない事柄について認識するためには、言葉を用いて正しく思い浮かべるほかないから。
- ウ 自分とは無関係な事柄について正確に表現するためには、言葉の働きを利用して気付きを増やしていくほかないから。
- エ 未知の世界を構成している事柄について認識するためには、共通して理解できることを丁寧に押さえしていくほかないから。

〔問5〕⁽⁵⁾ しかし、そこに終わりが無いことは、自然の広さと複雑さ、「思考」の多様さを考えるだけで想像できます。とあるが、筆者がこのような述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 言葉のもつイメージの働きは状況によって作為的に使うことができてしまうから。

イ 言葉の意味には現実には当たらないイメージが無数に存在してしまっているから。

ウ ざっくりとながら言葉によって意味されている内容を理解できてしまっているから。

エ すべての事物や感情それぞれに一致する言葉が必要になってしまっているから。

〔問6〕

波線部このように、現実^{じゆんじつ}に結びつかない側面があるからこそ、体験できない宇宙の彼方や極微の世界を言葉によって理解し、言葉によって物語を生み出すことができます。とあるが、ここでの「言葉」の働きについてあなたはどのように考えるか。あなた自身^{みづかみ}の経験や見聞を含めた具体例を挙げて根拠とし、二百字以内で書け。ただし、「宇宙の彼方や極微の世界」は使わないこと。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

式子内親王^{しやくしなほしんのう}を例に挙げよう。『新古今集』に四十九首も選入された大歌人で、『百人一首』の歌人でもある。後白河院^{*ごしろかわいん}の皇女で、賀茂^{*かもの}の斎院^{さいいん}も務めた。没したのが建仁元（二二〇）年正月と明確である一方、生まれた年は長らく不明だったが、近年の一九八七年、上横手^{*うわよこて}雅敬^{まさたか}氏^しによって、久安五（一一四九）年であること、つまり数え年五十三歳で没したことが明らかにされたのである。これほどの著名歌人の出生年が、二十世紀も終わるころになって判明するとは、と学界でもしばし話題となった。ただ、こうした事柄は、歌人であるかどうかとは一応切り離して考えられる、式子内親王その人の情報である。これを「現実の作者」の情報としておこう。つまり、歌人以前に、現実社会を生きる「現実の作者」がいるわけである。

さて、この式子内親王の代表作といえは、先に述べた『百人一首』の、

百首歌の中に、忍恋を

式子内親王

A 玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

（新古今集・恋一・一〇三四）

命の糸よ。途切れるなら途切れよ。もし生き延びでもしたら、弱りはててこの恋を秘密にしていられないかもしれぬ。

だといわれることが多い。たしかに名歌の誉れ高い歌である。ただ、恋の歌としては、少々常軌^Iを逸したところがないではない。呼び掛け（初句）、仮定+命令（第二句）、仮定（第三句）、懸念^{けねん}（第五句）と、普通の叙述がほとんどない。上から下まですべての語に何らかの情意・情動

がこめられている。初句・第二句と連続して句が切れて、おまけに、恋が露見してしまうくらいなら死んだ方がまだ、などと言うのだから、よほど差し迫った恋心である。おそらく、世人に知られたら破滅を覚悟するほかない相手でもあるのだろう。ずいぶん 1 的な状況だ——と読みうるけれども、こういう読解は、あくまで和歌を作品として独立して味わうことで生まれてくるものだ。和歌作品の中で、恋に苦しんでいると読み取られる人物を、「作品の中の作者」としておこう。物語や小説でいえば登場人物だし、あるいは「作中主体」という言葉の方がわかりやすければ、それでもかまわない。あくまで作品という舞台に登場している人物のことである。

(1) ここで確認しておきたいのは、「現実の作者」と「作品の中の作者」は、基本的に別々の存在であることである。この歌は、現実の恋愛の渦中で詠まれた歌ではない。『新古今集』の詞書によれば、「百首歌」という、一人で百首まとめて歌を詠む催し事の中で詠まれた。残念ながら、いっどこで行われた「百首歌」だったのかは不明であるが、「忍恋（しのぶこひ・しのぶるこひ）」という題で詠まれた虚構の産物であることは確かだ。恋心を打ち明けられずに堪え忍んでいるという、架空の状況の中の出来事として味わうことが求められる。実は、この作品の中の作者は、女性ですらない。後藤祥子氏*ことばがきが明らかにしたように、この歌は、男の立場で詠まれたものと考えるのが自然である。先ほども述べたように、一首は「忍恋」の題での詠なのだが、「忍恋」とは恋の早い段階を指し示し、それゆえ求愛する状況なのであって、求愛といえれば男性の立場で詠むのが正しい詠み方だからである。式子内親王は、恋してはならぬ女性に恋をしてしまった男、という役どころを演じて詠んだのであった。ところが、一首はしばしば式子内親王の実人生と重ね合わせて読まれてきた。後白河院の皇女として生まれ、神に仕える賀茂の斎院を務め、生涯独身を通した彼女に、どうしてこんな情熱的な歌が歌えたのだから

う、もしかしたらそういう秘めた恋をしていたのではないか、という具合にである。藤原定家・式子内親王*むねのていそれぞれの恋の妄執を語る能『定家』なども、その一つといってよいだろう。『定家』では、この歌が重要な役割を負っているのである。二人の恋愛など、事実かどうかはまったく不明で、仮に事実であったとしても、この歌の解釈に反映させるのが不適当なことは、「作品の中の作者」が男であること一つをとっても明らかである。しかしそういう読み方を誘い出すのも、やはり和歌の働きである。歌の醍醐味*たごみの一種、といえればよからうか。つまり、「作品の中の作者」は「現実の作者」とまったく別物とは言い切れないのである。二人の作者の間には微妙な引力が働いていて、チャンスがあれば重なり合おうとする。それはそうだろう。歌は「心」を表すことは間違いないのだし、その心には、やはり真情を汲みたくなるのが人情というものである。くっつきたり離れたりするその融通無碍*ゆうずうむげな関係を捉えるためには、二人の作者の間を媒介するような、第三の作者に登場してもらうほかない。それが「歌を作る作者」である。⁽³⁾

「歌を作る作者」といったからといって、何も特別なものを想像する必要はない。言葉に向き合い、取捨選択し、組み合わせで完成させてゆく人のことである。それは「現実の作者」のことではないか、と疑問に思われるだろうか。たしかに、言葉を操る主体ということでは、一面は現実存在する作者である。しかし歌を、まさに今作りつつある最中のことを考えてみよう。作っている彼（彼女）は、もはや日常生活を行っている、日常的な人間ではないだろう。現実とは別の宇宙を持っている和歌の世界に近づこうとし、そのあげくに引き寄せられて、普段とは別の人格に変化している。和歌的世界の理想に導かれて、儀礼的空間の中で演技するよう求められるからである。つまり、もう半面は和歌として表現されるべき自分、「作品の中の作者」としての性格を持つのである。

「歌を作る作者」は、「現実の作者」が「作品の中の作者」に転じてゆく、まさにそのターニング・ポイントに位置している。

例えば、式子内親王の「玉の緒よ」の歌では、「絶え」「ながらへ」「弱り」はすべて「玉の緒」の縁語^{*}になっていく。かなり縁語を多用している歌なのである。情熱的な内容ばかりに目をくらまされていくと、こういうレトリックへの評価^{II}がしにくくなってしまふ。現行の注釈書でも、少々手に余るところがあるようで、この四語が縁語にもなっている、という2²的な扱いをされることが多い。だが、それでよいのだろうか。これらの縁語は、けっしてたまたま用いられているわけではない。では、縁語を駆使していることと、「情熱的な内容」とは、どう関わるのだろうか。

むしろこの場合は、縁語という手掛かりがあったからこそ、普通では突き詰められない感情まで露わにすることができたと見なすべきなのだろう。「絶え」の繰り返しはもとより、「忍ぶる」以外は全部^{III}未来^{III}の状態動作であったりするなど、この歌の言葉はたしかに尋常ではない。本来ならあざとすぎる感情の吐露だと非難されてもおかしくない。縁語のおかげで、ようやくそれらは必然性を確保している。縁語は、文字通り真珠を貫く糸（「玉の緒」）のようなもので、はじけ散ってしまふような言葉たちを、ようやくつなぎとめている。

例えば、自分をまるごと相手にゆだねるような、激情あふれるラブレターをいきなりもらったとする。嬉しいと思うより、困惑することの方が多いに違いない。突然そこまで言われてもと、逆に拒否感を抱くこともある。自分の気持ちばかりが先走って、^{IV}肝腎^{IV}の相手のことを顧慮していなかったりするのである。「玉の緒よ」の歌は違う。これらの縁語は、「作品の中の作者」の、ほとぼしるような感情の一つ一つに必然性を与えている。ほら、やっぱりそうになっていく運命なのです、とでも言わねばかりに、「玉の緒」の糸が手繰り寄せられながら、訴える

言葉がそこからめ取られてゆく。すると簡単には拒否できなくなる。受け止める方もいつの間にか巻き込まれてゆく、という仕掛けになっているのである。だから「歌を作る作者」も、安らかに想像の世界に遊ぶことができる。そして、これまでにない「作品の中の作者」に変貌していく。縁語は、「歌を作る作者」が、自らを共感可能な「作品の中の作者」へと変えるための仕掛けなのである。作者を社会化するための装置といつてもよい。

縁語に導かれるままに、彼女の想像力は大きく跳躍^Vする。普通だったら、言葉がばらばらになってしまふところである。ところが彼女は、解体する直前に一つの抒情^{じじょう}にまとめ上げた。こういう芸当は、さまざまな人間のさまざまな情念に対して、いちいち自分を当てはめてみる意思と努力がないと得られないものだろう、と思う。自分だったらこう思うだろう、ああ感じるだろうという具合に、である。こういう人は、思いやり深い反面、思い込みが激しいという側面がありそうだ。魅力はあるが、不安定であやうい。その点で『定家』に描かれる姿も不自然ではない、といふべきだろうか。また式子内親王が、新古今歌人として新しい表現の試みを積極的に推進した「歌を作る作者」であったのも、なるほどとうなずける。

「歌を作る作者」という問題は、和歌史のさまざまな局面で取り上げられてきた。最初に正面から取り扱われたのは、紀貫之^{きつらゆき}の手になる『古今集』の仮名序である。

B 古^{いにし}への代々の帝^{みかど}、春の花の朝、秋の月の夜^よごとに侍^{さむら}人々を召して、事につけつつ、歌を奉^{たてまつ}らしめ給^{たま}ふ。あるは花をそふとてたよりなき所にまどひ、あるは月を思ふとてしるべなき間にたどれる心々を見給^{みか}ひ、賢^{さか}し愚かなりと知ろしめしけむ。

古代の代々の帝は、春の花の咲く朝や秋の月の照る夜ごとに臣下たちをお呼びになり、折々の事柄にちなんで、歌を献上させなされた。ある者は花を何かに託して表現しようとして不案内な場所をさ迷い、ある者は月を慕って手引きもない闇を手探りするようなことになる、そんな心中をご覧になって、誰が賢く誰が愚かかをご判断なさったそうだと。

(4) 古代の天皇は、四季折々に群臣を召し、和歌を詠ませ、その折々の風物をどう表現するかで、臣下の賢さ・愚かさを判断したのだという。なぜ、和歌などで人の賢愚が判定できるといえるのだろうか。歌のうまさと社会的な有能さなど、むしろ対極にあるような事柄ではないのか。

花や月の美しさを表現する。それはすでに個人的な感情ではない。花月に感動することそのものが、宮廷人としての資格を表すのであり、それを表現するとは、宮廷人の思いを望ましい形で代弁する行為である。だから、風物への感動の表現とは、演技されるものにほかならない。ただ感情をストレートに表せばよいというものではないのである。その場にふさわしいように、皆で共有できるように工夫する必要がある。個人的な心情を社会化すること、社会化されたものとして感情を表現することが求められる。(5) 和歌の言葉の工夫とは、自分を社会化する努力の跡であり、社会化する過程を露呈させるものなのだ。だから和歌の作り方によって、その人物の社会性が、つまり賢愚が判断できるといいうわけなのだろう。

C 月見れば千々にものこそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど
(古今集・秋上・一九三・大江千里)
*おおえのちさと

月を見ていると心が散り散りになるほど悲しい。私だけのため
の秋でもあるまいに。

について、正岡子規は、上三句はよいが、下二句は理屈であり蛇足だ、と非難した(『歌よみに与ふる書』)。歌は感情を述べるものなのに、理屈を述べるのは歌を知らないからである、と罵倒する。「わが身一つの秋と思ふ」と述べれば理屈でなかったのに、という改善案も示している。自分だけの秋だと感じるのが実感だからということなのだろう。彼は触れていないが、「千々」と「一つ」が上句と下句に対照的に配置されているのも、漢詩の対句に倣ったもので、「理屈」に加えておくべきものだろう。しかし、「私だけのための秋だ」としか思えない」と自分中心に言わずに、「自分だけのための秋でもあるまいに」と言うからこそ、また「千々」と「一つ」を対照させるからこそ、自分勝手な思いの吐露ではありません、人々との共通の「心」を経由しています、という宣言になるのだろう。しかも、理屈に収まらない、自分だけの悲愁も表しうることになる。『古今集』仮名序に語られている「歌を作る作者」は、人が自らの心を社会化する過程を示していたのである。

(渡部泰明「和歌とは何か」(一部改変)による)

〔注〕 後白河院——平安時代の皇族。

賀茂の斎院——下鴨神社と上賀茂神社に奉仕した皇女。

上横手雅敬——日本の歴史学者。

詞書——和歌の前書き。

後藤祥子——日本の国文学者。

藤原定家——鎌倉時代の歌人。

融通無碍——考え方や行動が何にもとらわれず、自由でのび

のびしている様子。

儀礼的空間——複数の人間がルールや約束事を共有しながら、特定の役割意識に基づいて行動する空間。

縁語——和歌の修辞法の一つで、ある言葉と意味的に関連の

深い別の言葉と同じ歌の中に詠み込むこと。

紀貫之——平安時代の歌人。

仮名序——仮名で書かれた序文。

大江千里——平安時代の歌人。

〔問1〕 次の①、②に答えよ。

① 常軌、^I 評価、^{II} 未来、^{III} 肝腎、^{IV} 跳躍、^V 賢愚の中で同じ構成の熟語を選ぶ時、最も適切な組み合わせは次のうちどれか。

- ア IとVI イ IIとIII
ウ IIとV エ IVとV

② 及び 2 に当てはまる語の組み合わせは次のうちどれか。

- | | | |
|---|---|---|
| ア | 1 | 2 |
| イ | 1 | 2 |
| ウ | 1 | 2 |
| エ | 1 | 2 |
- 1 || 誇大 2 || 補足
1 || 悲劇 2 || 付随
1 || 観念 2 || 便宜
1 || 感傷 2 || 象徴

〔問2〕⁽¹⁾ ここで確認しておきたいのは、「現実の作者」と「作品の中の

作者」は、基本的に別々の存在であることである。とあるにもか

かわらず、⁽²⁾ つまり、「作品の中の作者」は「現実の作者」とまっ

たく別物とは言い切れないのである。と言えるのはなぜか。次の

うちから最も適切なものを選べ。

ア 本来和歌は実生活からは独立して味わうものであり「作中主体」は「作品の中の作者」ではないものだが、詠み手として捉えることが難しい場合は作者自身を主人公として扱わなければならないから。

イ 本来和歌は架空の世界を詠まなければいけないものであり「作中主体」は「現実の作者」ではないが、作者がすでに情熱的な恋をしていたという読み方を誘い出すのが和歌の醍醐味であるから。

ウ 本来和歌は虚構で詠まれる時に「作中主体」が「現実の作者」と異なるはずのものが、作者自身の視点で和歌が解釈されると二種類の作者にはほとんど差異がなくなってしまう場合もあるから。

エ 本来和歌は求愛する状況を詠むものであり「作中主体」は「作品の中の作者」に近い立場であるものだが、現実の恋愛渦中で詠まれている場合はそれぞれの作者が同じ人物として考察されるから。

〔問3〕⁽³⁾ それ「歌を作る作者」である。とあるが、「歌を作る作者」

とはどういう存在か。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 現実世界を生活する状況にありながらも、作品制作の過程で作品世界に接近し、作者である自分として振る舞っている存在。

イ 和歌で詠まれる理想的な世界に憧れて普段とは別の人格に変化しながらも、日常生活を行う人間として振る舞っている存在。

ウ 現実とは別の宇宙を持って想像の中に遊びながらも、作品を詠む際に儀礼的な空間の中で行儀良く振る舞っている存在。

エ 現実とは異なる和歌の世界に導かれながらも、情熱的な作品内容ばかりに注目し、偽りの自分として振る舞っている存在。

〔問4〕⁽⁴⁾ 古代の天皇は、四季折々に群臣を召し、和歌を詠ませ、その折々の風物をどう表現するかで、臣下の賢さ・愚かさを判断したのだ

という。とあるが、「折々の風物」とは例えばどのようなものか。

本文中から記載されている順に二つ過不足なく抜き出して書け。

〔問5〕⁽⁵⁾ 和歌の言葉の工夫とは、自分を社会化する努力の跡であり、社会化する過程を露呈させるものなのだ。とあるが、社会化を實踐

した具体的な表現として最も適切な箇所を本文中の和歌から十二

字以上十五字以内で抜き出して書け。

〔問6〕 本文の内容説明として適当でないものを次のうちから一つ選べ。

ア 式子内親王の場合、生年が二十世紀の終り頃に判明するなど「作品の中の作者」が独り歩きしている状況であったため、「現実の作者」について理解しようとする際にも、かわりに「作品の中の作者」像がイメージされてしまっていた。

イ 「忍恋」という題で詠まれたAの和歌は、状況から考察すると男性側の視点で詠まれているはずのものであるが、長い間女性である式子内親王自身の視点で詠まれた歌だと勘違いされてきたため、藤原定家との恋愛が事実だと捉えられてきた。

ウ Bの文章によると、宮廷に仕える者としてふさわしい行為が花や月等の美しさを詠むことであり、普遍的な感情を詠み込むことを良しとした価値観があったため、古代から日本の為政者は折々の風物を大切にし臣下に和歌を詠ませることでその人間性や能力を評価していた。

エ 正岡子規は、Cの和歌が理屈に偏り実感が込められていないと批判したが、「歌を作る作者」とは他の人たちが共感できるような詠み方をする立場であるため、それは自身の心情を社会化させる過程を示しつつ他の種類の「作者」の中間に位置付けられるものである。

3
|
所

国

五
百